

おかない。この絶対の自己の光こそが、すべての国の、すべての人人を照らし、一切の貪りと、怒りと、怨みとを除いて、地獄の火を滅ぼすのである。」

この『大無量寿経』の一節が、サンスクリット語（駐日インド大使ラルジ・メロトラ筆）をもつて、鐘口にくまどつて刻まれた。

人類の歴史を貫通して、叫ばれてきた、この仏陀の誓い。これこそが、被爆者の衷心に輝く、平和の悲願である。

この悲願が、一本の**撞木**に凝結して、我が盲目の核を打ち砕くとき、死ぬことのない生命の自覚の讃歌が、全宇宙に響きわたるのである。

この魂の自覚の響きは、天体の輝きに呼応する。それは、宇宙生命、そのものの願心である。

この宇宙の心を表現して、この鐘の肩廻りには、日と、月と、南十字星と、北斗七星とが、夫々、東・西・南・北に位置し、一連の瑞雲が、これを結んでいる。

かくて、この鐘は、二羽の鳩を配した、龍頭をもつて、**宇宙型の鐘堂**につるされる。

宇宙を表現した丸屋根を、四本の柱が支える。その宇宙の中心に、地球の中心が重なる位置に。

この中心の一点こそ、本来の自己の座であろう。

しかし、宇宙を支える柱とは、何であろうか。

(1)生成。(2)持続。(3)破壊。(4)消滅。

即ち、万物の流転である。

而して、人間は、これを、生・老・病・死の四苦として、体験するのである。

自己を私有するものにとつて、苦しみの世界であるこの宇宙は、自己を解放したものとつては、実に、浄土なのである。

鐘堂の周囲には、**玉池**を作つて、色とりどりの、貴重な蓮が植えられて、浄土を莊嚴する。